

青年期における対人恐怖の実態について

福井 康之* 小嶋 秀夫**

はじめに

対人恐怖は日本人特有のノイローゼであるとされてきた。特に森田神経質症者の多くは対人恐怖を主訴としていたため、その研究と治療は森田学派によって精力的になされていた。近藤(1970)によると、その症状発現の機制は、日本独自の親子関係から期待される配慮的要請と青年期における自己主張的要請の葛藤として説明されている。これは対人恐怖が日本独自の文化形態から生ずるとする、性格形成上の問題としての視点である。

Hay, G.G. (1970)は対人恐怖のカテゴリーに入ると考えられる醜形恐怖(Dysmorphophobia)のいくつかの症例を論じるなかで、Dietrich, H. (1962)が、これらの症者はパーソナリティの特殊なタイプであるという、森田学派と似た見解を紹介している。これからみて、対人恐怖は必ずしも日本独自の文化形態に起因する症状とはいいい切れないともいえるが、諸外国では、これらの症状についての報告がほとんどなされていないし、また、このような症状が障害としてとりあげられるのが稀であると察せられる。少くとも筆者の散見したところでも、外国人で赤面する人はいくらでもいるようだが、Gibbs, D.N. (1965)は赤面恐怖の治療例の報告の中でこれらは治療的な扱いを受けることは少ないといっている。

笠原ら(1972)は、対人恐怖症の訳語として *Anthropophobie* や *homilophobia* の語をあてるのは不適切であり、むしろ、Janet, P. の恐怖症の4分類中の一つである *Phobies de situations sociales* が正確に相当するとしている。これは対人恐怖がヒトそのものへの怖れでなく、病者特有の対人関係の認知の仕方が障害として把握されることを意味している。このような病像の把握の仕方が、精神分裂病へのアプローチに類似していることから、重篤な対人恐怖症者を精神分裂病者とのボーダーラインケースとして考察を加え、分裂病解明への手がかりを求めようとする傾向が、わが国の精神医学界に一つの動向として現われている。

西園(1970)が西田(1968)を紹介して指摘しているように、第二次世界大戦前においては代表的であった赤面恐怖が恥の意識より生じた症状で、これが戦後影をひそめ、視覚・聴覚的關係念慮の形をとった視線恐怖や自己臭を訴える患者が急増してきた。これは人間関係に対する「おびえの意識」が主体となってきていると指摘されている。特に自己臭患者では周囲の人の咳や鼻を鳴らすという様な仕草から、自己が他者に迷惑がられているという妄想的な確信による被害意識を顕著に示す。これら分裂病者の妄想に類似した様相を持つ重篤な対人恐怖者の増大もボーダーラインとしての関心の増大につながると思われる。さらに、これら対人恐怖の症状はそのほとんどが、思春期を境として初発してくるということも、分裂病との類縁を感じさせるところがあり、青年期の精神衛生上の問題点として、今後、対人恐怖をめぐる領域をクローズアップさせるだろう。

* 金沢大学保健管理センター講師 Yasuyuki FUKUI

** 金沢大学教育学部助教授 Hideo KOJIMA

研究の目的

福井は青年期のクライエントを中心としたカウンセリングの技法究明のなかで、特に視線恐怖の行動療法による治療法を独自に開発してきた。思春期の特徴的ノイローゼとしての対人恐怖については、かねてからその実態の把握と理論的考察を深めたいと考えていた。

実態調査による研究としては、稲垣ら（1971）の神経症傾向調査や宮田ら（1970）のUPIによる大学生を対象にした調査の一部に対人恐怖傾向の実態を示したものが、また、小川（1971）による矯正所を訪れた対人恐怖症者を対象にした117項目の悩み調査の因子分析研究が報告されているが、森田学派の研究以外ではこの種の調査は少ない。今回、特に初発期に焦点をあてるため高校生を対象として選び実態調査を実施した。

本調査は対人恐怖の実態をいくつかの視点から整理するための予備調査であり、下記の実態を把握する手がかりを求めるものである。

- (1) 対人恐怖に関連する思春期の特徴的な心理状態を示す者はどのくらいの割合で存在しているか。
- (2) 明らかに対人恐怖症と考えられる者がどのくらいいるか。
- (3) 赤面恐怖等の恥の意識からの症状より、関係念慮からくる視線恐怖・自己臭等が果して多いだろうか。
- (4) 従来からいわれているように男女差があるだろうか。
- (5) 各症状が移行したり、併発することは稀といわれているが、実態はどうだろうか。
- (6) 対人恐怖重症型は分裂病へ発展移行の可能性は考えられるだろうか。
- (7) 症状の発現形式により、現在、赤面恐怖、吃音恐怖、視線恐怖A型（視られることへの怖れを意味する他者視線恐怖）と視線恐怖B型（つい人の目を視てしまう自分の視線の異様さを苦にする自己視線恐怖）、醜形恐怖、自己臭恐怖（体臭恐怖）と分類しているが、この分類は妥当なのか、各症状間に関連があるのか、または他の症状と関連せず一つの症状を選択的に発症させると考えるべきか、特に視線恐怖A型とB型は症状として区分できるものだろうか。

方 法

1. 調査票の構成

上記7点を調査の主目的として80項目からなる調査票を作成した。項目は1枚の用紙に16行×5列に配置され印刷された。縦に16ずつ80まで通し番号がつけられ、被調査者は番号順に各項目末尾の「はい」「いいえ」のどちらかに印をするよう教示される。項目の質問内容はすべて「はい」と肯定的に答えた場合は、その項目に示された状態が存在するという方向の質問形式になっている。横に並べられた5項目は特定の症状や状態として共通した質問内容からなり、仮定的に1列から5列へと項目内容は症状として重度が高いという順に配列されている。これら5項目を一つのクラスターとして16クラスターが仮定されることになる。

これらは①思春期に特徴的な他人を意識しすぎる過敏性や劣等感等を示す20項目で、対人過敏性（1列）、社会的内向（6列）、競争意識（11列）、劣等意識（16列）、②視線恐怖A型20項目（2, 7, 10, 15列）、③吃音恐怖5項目（5列）、④赤面恐怖5項目（9列）、⑤視線恐怖B型10項目（4, 13列）、⑥醜形恐怖5項目（8列）、⑦自己臭5項目（12列）、⑧分裂病に関するもの10項目は、分裂気質（3列）、分裂病的意識（14列）となっている。

これらの症状と対人恐怖の重さのレベルの関係は、笠原ら（1972, p 123）が仮説的に提出している次の対人恐怖の4段階と、はからずも一致を示している。

A) 平均者の青春期という発達段階に一時的にみられるもの

B) 純粋に恐怖症段階にとどまるもの

C) 関係妄想性をはじめから帯びるもの

D) 前分裂病症状として、ないしは分裂病の回復期における後症状としてみられるもの

Aのレベルとして①の項目、Bのレベルとして②③④、Cは⑤⑥⑦⑧、Dが⑨の項目にそれぞれ対応している。調査票の用紙は表1のとおりである。

2. 調査の実施

1971年7月、金沢市内公立S高校の1年から3年まで、協力いただいたクラスの生徒を対象に、無記名で回答を求めたところ、男子424名、女子449名、計873名回収できた。回答は「はい」「いいえ」いずれかの強制2選択肢形式であり、記入のない項目のある用紙が109枚あり、残りの男子363名、女子401名、計764名分を改めて集計した結果による分析を行った。なお、施行者であるクラス担任が配布回収し、教示は「質問に対して自分にあてはまると思うときは「はい」、あてはまらないときは「いいえ」に○印をつけてください。」と調査票に記入してある。

3. 分析の方法¹

研究目的の(1)~(4)までについては、男女別の項目肯定率を求めて比較・検討する。(5)~(7)の目的を達するためには、専門家による診断という外在基準や、同一被験者群の追跡調査が必要であるが、そのような研究の前段階のものとして、今回は、調査項目群の内部構造を探ることとする。そこでまず、男女をコミにした764の大きさの標本における項目間の相互相関(ファイ係数)行列を求め、共通性を重相関係数の2乗(Harman, 1967)で推定したうえで、主因子分析を行なった。得られた因子行列に対して、客観的な直交軸回転の代表的な手法であるVarimax回転を行ない、因子の心理学的解釈を容易にした。その際、回転を行なう因子数は一定の範囲内で組織的に変えた。

調査票の構成のところでも述べてあるように、調査票において仮定されている16クラスターのうち、2, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 12, 13, および15の10クラスターは、対人恐怖自体に関するものであり、残りの6クラスターは、対人恐怖と結びつく可能性をもつ諸特性を取り上げたものである。16クラスター80項目全体の因子分析は、対人恐怖に関する高校生の主観的報告の因子構造を明らかにするという目的には適切でない。直接、対人恐怖に関しない30項目を含んでいることが因子構造を乱すのである。そこで今回は、対人恐怖に関する50項目の分析を中心として行ない、そこで見出された因子を軸として、残り30項目との関係を調べることにした。

結果と考察

1. 項目肯定率の検討

仮定的に対人恐怖に関連深いものとして選ばれている10クラスター中の項目の肯定率が表2の右端に示されている。肯定率の高いものとして、2.「他人の視線が気になる」という程度の反応は男女とも71.6%を占めており、9.「赤面することが多い」程度は男女4割強認められる。しかし、肯定すればおそらく対人恐怖症と考えられる、20, 28, 31, 36, 44, 45, 60, 61, 68, 73, 76, 77, 等の項目の肯定率を見ると男子では3%から約2割、女子では2%から約1割前後あり、これらは対人恐怖がノイローゼの段階に進行していることを反映しているのでは

1: これらの計算は京都大学大型計算機FACOM 230-60および金沢大学計算機FACOM 230-35を用いて行なわれた。

表 1

精 神 衛 生 実 態

これは高校生の悩みの実態を調べるためのものです。氏名を記入する必要はありませんので、正直に答
○印をつけてください。

1. 人前ではあがってしまう	はい いいえ	17. 授業中であてられないか とビクビクしている	はい いいえ	33. 人前で話すと、 るえる
2. 他人の視線が気になる	はい いいえ	18. 人の視線が目について仕 方がない	はい いいえ	34. 人の視線に圧倒
3. 身体がやせている方であ る	はい いいえ	19. 自分のことをうわさされ ているようにいつも感じ る	はい いいえ	35. 人が笑っている のことかと思う
4. 人に出会うと目のやり場 に困る	はい いいえ	20. 自分の目つきが、人前で 不自然にきつくなる	はい いいえ	36. 目つきが異様だ
5. 人前では声がふるえる	はい いいえ	21. 人前に出ると言葉がなめ らかに出ない	はい いいえ	37. 人前に出ると、 つまる
6. 異性に取り囲まれると、 いたたまれなくなる	はい いいえ	22. デパートへ一人で買物に 行けない	はい いいえ	38. 一人で理髪店や 行けない
7. 人の顔を、まともに見ら れない	はい いいえ	23. 話をするときには、いつも 下を向いている	はい いいえ	39. 横に坐っている なって仕方がな
8. 自分の顔がみにくくと思 う	はい いいえ	24. 容ぼうで人より劣るとこ ろがある	はい いいえ	40. 身体の一部に人 とところがある
9. 赤面することが多い	はい いいえ	25. 自分の顔が赤くなってく ると、ますますドギマギ する	はい いいえ	41. 話をしていると 顔が赤くなって 判る
10. バスに乗ったりしても、 坐らないで窓の外を見る ようにしている	はい いいえ	26. 電車やバスで、向い合っ て座席にすわるのがいや だ	はい いいえ	42. そばに人がいる をしても食べて しない
11. 人を意識しすぎる	はい いいえ	27. 人のおもわくを気にする	はい いいえ	43. いつも、人にば ないかと気にす
12. 自分の身体のおいが、 人を不愉快にしている	はい いいえ	28. 自分の身体から変なにお いが発散している	はい いいえ	44. 胃腸が悪く、身 臭を発散させて
13. どうしても、つい人の目 をみてしまう	はい いいえ	29. 見られた相手を、いつも にらみ返してやる	はい いいえ	45. 自分の目が、異 を持つている
14. 自分は特別に選ばれた存 在である	はい いいえ	30. 周囲の人と違和感がある	はい いいえ	46. 自分にそれとな るため、周囲の などで合図をす
15. 心の中をみすかされてい るようで、人の視線がこ わい	はい いいえ	31. 視野に人の顔が入らない よう、いろいろ工夫する	はい いいえ	47. 背後からでも、 れているような
16. 劣等感にとらわれている	はい いいえ	32. 他の人と同じように、気 楽に生活したい	はい いいえ	48. 自分は、皆に迷 ている

調 査 票

(学 年 組 男 女)

えてください。質問に対して自分にあてはまると思うときは「はい」あてはまらないときは「いいえ」に

身体がふ	はい いいえ	49. 異性の前では、ものもい えない	はい いいえ	65. 皆と同じように人と話が できればよいのにと思う	はい いいえ
される	はい いいえ	50. 向うから来る人の視線を 避けるのが、ぎこちなく なる	はい いいえ	66. 道を歩いていて、知って いる人に会うのがいやだ	はい いいえ
と、自分	はい いいえ	51. 自分は、他の人とどこか 違っているところがある	はい いいえ	67. 自分だけは他人とは違っ た運命をもっている	はい いいえ
と思う	はい いいえ	52. 相手の目を見ると、必ず 相手は目をそらす	はい いいえ	68. 自分の目つきが人を不快 にする	はい いいえ
ことばが	はい いいえ	53. どもりはしないかと、い つも気にする	はい いいえ	69. 自分はどもりである	はい いいえ
美容院へ	はい いいえ	54. できるかぎり人に会いた くない	はい いいえ	70. 他人が自分をどう思っ ているか気がかりである	はい いいえ
人が気に い	はい いいえ	55. 授業のとき、先生がいつ も自分の方を見ているよ うに思う	はい いいえ	71. 近所の人に会っても、あ いさつできない	はい いいえ
より劣る	はい いいえ	56. 自分の表情が、相手を不 愉快にする	はい いいえ	72. いつか美容整形をするつ もりだ	はい いいえ
、自分の くるのが	はい いいえ	57. 自分のことをいわれてい るように思い、顔がほて ってくることもある	はい いいえ	73. 赤くなった顔を見られた くないので、わざと暗い 所か日の当たるところにいる	はい いいえ
と、食事 いる気が	はい いいえ	58. 買物に行くと、店員がに らんでいるように思う	はい いいえ	74. クラブなどで数人と議論 したりするのが苦しい	はい いいえ
かにされ る	はい いいえ	59. 人にけいべつされたくな い	はい いいえ	75. 人には負けたくないと思 う	はい いいえ
体から悪 いる	はい いいえ	60. お腹のガスがいつも外へ 漏れている	はい いいえ	76. 知らないまにおならが漏 れている	はい いいえ
様な輝き	はい いいえ	61. 自分の目を憎んでいる	はい いいえ	77. いっそう目が見えない方 がましである	はい いいえ
く知らせ 人がせき る	はい いいえ	62. 自分をやっつけようとだ れかにつけねらわれてい る	はい いいえ	78. 自分の心が他人にあやつ られている	はい いいえ
人に見ら 気がする	はい いいえ	63. だれかに、いつもみつめ られているような気がす る	はい いいえ	79. 他人が見ると、自分の心 がわかってしまう	はい いいえ
惑をかけ	はい いいえ	64. 自分は、精神的にかたわ である	はい いいえ	80. 外出するのはきらいであ る	はい いいえ

表2

Varimax 回転された9箇の主因子

項	目	I	II	因子 III
2	他人の視線が気になる	0.30	-0.02	0.12
4	人に出会うと目のやり場に困る	0.36	0.04	0.06
5	人前では声がふるえる	0.11	0.19	0.25
7	人の顔を、まともに見られない	0.29	0.08	0.15
8	自分の顔がみにくいと思う	-0.01	0.08	0.15
9	赤面することが多い	0.03	0.06	0.62
10	バスに乗ったりしても、坐らないで窓の外を見るようにしている	0.25	0.14	0.05
12	自分の身体のおいが、人を不愉快にしている	0.05	0.02	0.01
13	どうしても、つい人の目をみてしまう	-0.01	0.06	0.12
15	心の中をみすかされているようで、人の視線がこわい	0.34	0.12	0.12
18	人の視線が目について仕方がない	0.22	0.03	0.06
20	自分の目つきが、人前で不自然にきつくなる	0.05	0.06	0.10
21	人前になると言葉がなめらかに出不い	0.21	0.06	0.33
23	話をするとき、いつも下を向いている	0.18	0.19	0.11
24	容ぼうで人より劣るところがある	0.11	-0.03	0.09
25	自分の顔が赤くなってくると、ますますドギマギする	0.11	0.05	0.55
26	電車やバスで、向い合って座席にすわるのがいやだ	0.47	0.09	0.05
28	自分の身体から変なおいが発散している	0.05	0.12	0.03
29	見られた相手を、いつもにらみ返してやる	-0.04	0.20	-0.16
31	視野に人の顔が入らないよう、いろいろ工夫する	0.28	0.08	0.05
34	人の視線に圧倒される	0.39	0.04	0.23
36	目つきが異様だと思う	0.02	0.05	0.04
37	人前に出ると、ことばがつかまる	0.21	0.06	0.33
39	横に坐っている人が気になって仕方がない	0.17	0.10	0.06
40	身体の一部に人より劣るところがある	0.14	0.05	0.08
41	話をしていると、自分の顔が赤くなってくるのが判る	0.06	0.00	0.64
42	そばに人がいると、食事をしても食べている気がしない	0.39	0.18	0.08
44	胃腸が悪く、身体から悪臭を発散させている	0.03	0.21	0.02
45	自分の目が、異様な輝きを持っている	-0.13	0.22	-0.08
47	背後からでも、人に見られているような気がする	0.32	0.09	0.10
50	向うから来る人の視線を避けるのが、ぎこちなくなる	0.50	-0.01	0.06
52	相手の目を見ると、必ず相手は目をそらす	0.05	0.16	-0.08
53	どもりはしないかと、いつも気にする	0.11	0.44	0.18
55	授業のとき、先生がいつも自分の方を見ているように思う	0.08	0.18	0.09
56	自分の表情が、相手を不愉快にする	0.19	0.13	0.08
57	自分のことをいわれているように思い、顔がほてってることがある	0.25	0.08	0.42
58	買物に行くと、店員がにらんでいるように思う	0.20	0.18	0.08
60	お腹のガスがいつも外へ漏れている	0.06	0.30	0.02
61	自分の目を憎んでいる	0.12	0.28	0.02
63	だれかに、いつもみつめられているような気がする	0.21	0.15	0.01
66	道を歩いていて、知っている人に会うのがいやだ	0.49	0.03	0.00
68	自分の目つきが人を不快にする	0.17	0.12	0.09
69	自分はどもりである	0.04	0.45	0.05
71	近所の人に会っても、あいさつできない	0.21	0.08	0.00
72	いつか美容整形をするつもりだ	0.01	0.41	-0.02
73	赤くなった顔を見られたくないので、わざと暗い所か日の当たるところによる	0.10	0.42	0.16
74	クラブなどで数人と議論したりするのが苦しい	0.37	0.17	0.14
76	知らないまにおならが漏れている	0.08	0.55	0.05
77	いっそう目が見えない方がましである	0.12	0.39	-0.09
79	他人が見ると、自分の心がわかってしまう	0.15	0.26	0.13
因子分散		2.45	1.99	1.94
共通因子分散率 (%)		16.24	13.16	12.89

α * $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

注 因子係数の太字は、統計的に有意と考えるとよいものを示す。また、肯定率の太字は、異性より統計

と、項目肯定率の男女別比較

(N = 764)

IV	子					IX	共通性	肯定率(%)		z	有意水準 ^a
	V	VI	VII	VIII	男 (363)			女 (401)			
-0.04	0.30	0.03	0.08	0.14	0.05	0.23	71.6	71.6	0.02		
0.06	0.12	0.02	0.20	0.44	0.16	0.41	49.3	45.4	1.09		
0.02	0.12	0.11	0.41	0.27	0.03	0.38	28.7	23.4	1.64		
0.09	0.07	0.15	0.13	0.51	0.06	0.43	28.1	19.5	2.81	**	
0.05	0.05	0.05	-0.05	0.21	0.43	0.26	20.4	30.9	-3.32	***	
0.03	0.07	0.03	0.17	0.14	0.11	0.46	41.0	47.4	-1.76		
-0.10	0.15	0.05	-0.14	0.16	0.00	0.17	25.6	20.9	1.53		
0.10	0.05	0.65	0.06	0.12	0.12	0.48	9.1	6.5	1.35		
0.11	0.39	0.09	-0.15	-0.04	-0.05	0.22	37.7	38.9	-0.33		
0.22	0.25	0.01	0.02	0.20	0.09	0.30	18.2	19.0	-0.27		
0.06	0.53	0.06	0.12	0.21	0.11	0.41	27.0	19.0	2.65	**	
0.31	0.27	0.02	0.01	0.19	0.06	0.23	21.2	13.5	2.84	**	
-0.01	0.00	0.10	0.55	0.12	0.08	0.49	54.8	52.4	0.68		
0.15	-0.02	0.10	0.06	0.43	0.02	0.31	10.5	7.0	1.71		
0.04	0.01	0.01	0.04	0.05	0.63	0.42	49.6	65.1	-4.33	***	
0.06	0.08	0.03	0.05	0.05	0.07	0.34	48.5	62.3	-3.85	***	
0.07	0.09	0.02	0.03	0.12	-0.02	0.27	28.4	27.2	0.37		
0.19	0.04	0.70	0.04	0.05	0.05	0.55	10.7	7.5	1.57		
0.15	0.21	-0.01	0.05	-0.01	-0.08	0.14	29.8	13.5	5.50	***	
0.17	0.12	0.06	0.06	0.34	0.07	0.26	17.9	9.2	3.52	***	
0.10	0.18	0.07	0.13	0.20	0.21	0.36	25.1	27.4	-0.74		
0.60	0.17	0.15	0.02	0.10	0.02	0.42	11.0	6.2	2.37	*	
0.03	0.05	0.11	0.60	0.10	0.06	0.55	47.7	42.1	1.53		
0.09	0.35	0.04	0.07	0.02	0.11	0.19	17.9	12.0	2.31	*	
0.09	0.11	0.09	0.06	-0.05	0.49	0.30	43.5	58.6	-4.16	***	
0.06	0.04	-0.01	0.11	0.04	0.08	0.44	38.3	53.4	-4.17	***	
0.06	0.12	0.15	0.01	0.01	0.00	0.23	14.3	19.7	-1.97	*	
0.06	0.08	0.37	0.04	0.04	0.00	0.19	10.7	4.0	3.61	***	
0.43	0.24	-0.04	-0.02	0.02	0.00	0.32	13.8	6.0	3.64	***	
0.10	0.44	0.01	0.00	0.02	0.05	0.33	25.1	28.2	-0.97		
0.07	0.19	0.03	0.10	0.14	0.10	0.34	37.2	41.4	-1.19		
0.13	0.16	-0.02	0.19	0.04	-0.02	0.12	19.6	7.0	5.17	***	
0.01	0.17	0.14	0.22	0.03	0.01	0.34	14.0	6.5	3.47	***	
0.07	0.24	0.09	0.09	0.03	0.08	0.13	20.4	21.4	-0.36		
0.42	0.15	0.10	0.04	0.06	0.15	0.29	14.0	18.2	-1.56		
0.07	0.22	0.02	0.03	0.04	0.07	0.31	29.8	33.9	-1.23		
0.29	0.13	0.01	-0.02	0.05	0.04	0.19	9.9	11.7	-0.80		
0.21	0.02	0.12	0.04	0.08	-0.02	0.16	8.3	3.5	2.83	**	
0.33	0.09	0.11	0.07	0.08	0.22	0.28	9.6	9.2	0.20		
0.20	0.46	0.00	0.06	0.01	0.05	0.32	18.7	17.0	0.64		
0.16	0.07	-0.04	0.13	0.06	0.12	0.31	22.0	23.4	-0.46		
0.53	-0.02	0.19	0.01	0.01	0.07	0.37	6.1	7.2	-0.65		
-0.02	0.09	0.11	0.19	-0.01	0.00	0.27	7.7	1.2	4.39	***	
0.24	-0.02	0.01	0.18	0.02	-0.08	0.15	22.6	7.7	5.78	***	
0.15	0.10	0.03	0.08	0.01	0.15	0.23	6.3	2.5	2.61	**	
0.12	0.05	0.03	-0.07	0.11	0.04	0.25	6.1	2.7	2.25	*	
0.01	0.01	0.01	0.11	0.09	0.09	0.21	14.6	17.0	-0.89		
0.19	0.01	0.00	0.02	0.11	-0.04	0.36	6.1	1.5	3.35	***	
0.04	0.06	0.04	-0.08	0.02	0.00	0.18	3.0	2.7	0.24		
0.27	0.11	0.04	-0.04	0.06	0.13	0.21	12.1	9.2	1.30		
1.90	1.76	1.32	1.28	1.27	1.17	15.09					
12.60	11.66	8.75	8.49	8.43	7.78	100.00					

的に有意に高い方の比率を示す。

ないかと考えられる。しかも、これらの大半の肯定率は男子が高い。特に男子の方が女子より肯定率の高い項目は、7, 18, 20, 29, 31, 36, 39, 45, 52, 71と視線恐怖に関する項目であり、44, 60, 76は自己臭恐怖であり、12, 28の項目でも統計的に差がないが、自己臭は男子の肯定率が高い。53, 69は吃音であり、69「自分はどもりである」には女子1.2%に比して男子が7.7%も肯定している。男子より女子の肯定率の高いものは身体・容ぼうへの劣等感と赤面傾向である。対人恐怖は男子が多いという従来からの説は支持できそうである。赤面恐怖より、関係念慮からの対人恐怖症状が増えているかどうかは、この調査だけで速断できないが、軽い赤面傾向の項目9, 25, 41, 57への反応では3～6割近い者が肯定しており、特に女子が多い。項目73で男子6.1%, 女子2.7%が赤面恐怖と考えられ、必ずしも自己臭や視線恐怖が多いといいきれない。これは金沢市内の高校生という土地柄によるのかもしれない。都市部では自己臭の増加現象がみられるそうである。

2. 主観的報告の因子構造

表2は、Varimax回転された因子行列で、これと、これの転置行列とを掛けることによって、もとの50×50の相関行列を近似的に再現できる。これを逆から言えば、50×50の相関行列は、ほぼ50×9の主因子行列で説明できるのである。この結果をもとにして、各個人ごとに9つの相互に直交した(無相関の)因子得点を求めることができる。つまり、50項目への反応がもつ情報は、9つの因子得点に圧縮して表現できるのである。各項目の共通性が低いのは、計算の出発点となったファイ係数の性質による。

表2の50×9の数値は、因子パターン係数(普通、因子負荷量と呼ばれる)で、これは同時に、各項目と見出された因子との相関を表わしている。この情報をもとにして、見出された9因子のそれぞれが何であるかを解釈して行こう。

第Ⅰ因子は、項目50, 66, 26, 34, 42, 74などが主に相関しており、これは視線恐怖A型を中心に現われる対人接触の回避傾向といえよう。

第Ⅱ因子は、項目76, 69, 53, 73, 72, 77, 60などによって定義されるもので、その内容は腹のガス漏れ、吃音、美容整形、赤面、自己の視線などの多面にわたっている。これらの項目に共通の特徴は、自分の身体に対する強い否定であり、ノイローゼ段階での対人恐怖を示す因子である。しかし、別の解釈も可能である。即ち、これらは肯定率が低い(しかも、大部分女子の率が低い)項目で、ファイ係数は周辺度数に規定されるので、低肯定率項目の因子ともいえる。恐らく、この因子は、項目内容の反映でもあり項目肯定率とも関係しているのであろう。

第Ⅲ因子は、項目41, 9, 25, 57などによって代表される軽度の赤面を怖れる因子である。これらの項目は3～6割の生徒が肯定しており、しかも女子の肯定率が高いことが、第Ⅱ因子と相関した項目73と異なる点である。

第Ⅳ因子は、項目36, 68, 45, 56など視線恐怖B型を中心とした負荷を示しており、他者に不快感を与える自分の眠つき・顔に対する怖れを表わしていると考えられる。

第Ⅴ因子は、項目18, 63, 47, 13, 39など視線恐怖A型を中心とした項目が関係している。これの第Ⅰ因子からの分離は7因子解でも8因子解でも起っており、その原因は不明である。

第Ⅵ因子は、28, 12, 44という、ガスを除いた自己臭の項目により定義できる。

第Ⅶ因子は、37, 21, 5の項目が関係しているもので、吃音とまでは行かないが、人前でスムーズに話せないということばの因子である。

第Ⅷ因子は、7, 4, 23, 31などの比較的軽度の視線恐怖A型を中心とした因子のようである。これも因子Ⅴと同様に、因子Ⅰから分離した理由は不明である。

第Ⅷ因子は、項目24, 40, 8が関係しているの、容ぼうに関する劣等感の因子で、女子が高い肯定率を示している。

さて、今回の分析からはずされた6クラスターが、どの因子と相関するかを、大ざっぱに述べると、対人過敏性(第Ⅲ因子)、分裂気質(主としてⅤ, およびⅠ)、競争意識と考えられたもの(Ⅴ, Ⅰ)となり、社会的内向と考えられた項目群は、3つ以上の因子に散ばり、分裂意識と考えられたものや劣等意識と考えられたものも、特定の因子と関係づかなかった。

以上のように、高校生の主観的報告の分化は、大部分、項目内容に応じてなされていることが分ったが、2・3の因子の分化については十分に説明できなかつた。今回得られた情報をもとにして項目群の洗練をはかることにより、使用可能な尺度を構成する見通しが立った。今後は外在基準との関連を探る方向の研究を併行させて行くべきであろう。

(本論文は、金沢市において開催予定であった第21回精神衛生全国大会特集号として配布予定であった「いしかわ精神衛生 第14号 1973」に掲載されたものであるが、大会が中止になったため、許可を得て一部修正のうえ転載したものである。)

引用文献

- Gibbs, D.N. Reciprocal inhibition therapy of a case of symptomatic erythema. *Behav. Res. Ther.*, 1965, 2, 261-266.
- Harman, H. H. *Modern factor analysis.*(2nd ed.)Chicago: University of Chicago Press, 1967.
- Hay, G. G. Dysmorphophobia. *Brit. J. Psychiat.*, 1970, 116, 399-406.
- 稲垣卓, 他8名 青少年の神経症的傾向精神医学, 1971, 13, 799-809.
- 笠原嘉, 藤縄昭, 関口英雄, 松本雅彦 正視恐怖・体臭恐怖—主として精神分裂病との境界例について—医学書院, 1972.
- 近藤章久 対人恐怖について 精神医学, 1970, 12, 382-388.
- 宮田尚之, 笠原嘉, 稲浪正充 大学生の神経症への集団精神療法—対人恐怖症者に対して— 学校保健研究, 1970, 131, 552-557.
- 西田博文 青年期神経症の時代的変遷—心因と病像に関して— 児童精神医学とその近接領域, 1968, 9, 225-251.
- 西園昌久 対人恐怖の精神分析 精神医学, 1970, 12, 375-381.
- 小川捷之 対人恐怖症者の悩みに関する研究 第35回日本心理学会発表論文集, 1971, 607-608.

保健管理センター報告書 第4号

昭和48年10月31日発行

編集発行 金沢大学保健管理センター

金沢市丸の内1番1号

(電話62-4281・内線289)
